

三浦学園報

第 352 号 2002 (平成 14) 7.31

中部大学
名古屋第一高等学校
春日丘高等学校
春日丘中学校
中部大学技術文化専門学校

第 27 回創立者記念日

墓参と法要に 140 人が参加



あいさつする大西学園長

第 27 回目の創立者記念日の墓参と法要が 6 月 7 日午前、半田市の菩提寺・無量寿寺で開かれ、学園ゆかりの企業関係者、学園関係者、教職員約 140 人が参列した。

参加者全員が墓前に線香を手向けた後、本堂で法要が営まれ、読経が流れるなか全員が次々に焼香をした。

この後、大西良三学園長が昨年の創立者記念日以来の物故者 14 人を一人ひとり紹介した後「専任職員の内、創立者を知る人は 144 人、22% になりました。今年 9 月には日本物理学会総会が中部大学で開かれ 5,000 人ももの研究者が参加されます。こうした学会が開かれることに、物理学者であった幸平先生は大

変お喜びになっていることでしょう」などとあいさつを行った。

この後、全員が庫裏に移り学園長が今年のオハイオ大学からの三浦幸平客員教授であるマンジュリカ・コーシャル博士を紹介、博士は創立者が亡くなる 2 年前に始まった客員教授の赴任が今年で 29 代目になり、中部大学とオハイオ大学の絆を深めるためにこれからも努力を続けていきたいなどとあいさつを行った。お茶とお菓子をいただいてお寺を後にした。

寺崎昌男氏講演会

評価の新段階と FD 時代の大学教育
- 大学教員・職員の専門性にふれながら -

6 月 5 日、桜美林大学大学院教授寺崎昌男氏をお招きして、表記のテーマについてご講演をいただいた。寺崎氏は東京大学名誉教授であり、大学教育研究センターの客員教授でもある。大学における講演会も今回で 3 回を数える。

主 な 記 事			
*****		*****	
佐藤圭二教授が日本建築学会賞を受賞.....	2	平成 14 年度学園全体の学生・生徒・教職員数.....	8
中部の私立大学展.....	3	名一高が地区対象説明会実施.....	9
研修センターの一角に岐阜県営東濃スケート場建設	6	春日丘高生が大学と専門学校を見学.....	10
神和住・平井プロによるテニスレッスン.....	7	専門学校が「東海地区企業・医療関係者との就職懇談会」開催.....	10
*****		*****	

三浦学園 広報出版室発行



講演する寺崎氏

講演では、先ず我が国における大学教育政策が重層的な構造をなしており、大学教育に対する評価も同様に多層的になっていること 行政的評価・社会的評価・相互評価・外部評価の併存 が指摘された。行政的評価については緩和もしくは拡大路線にあるが、相互評価ならびに外部評価が、今後、ますます重要性を帯びてくることを強調された。就中、評価者を評価される側が選択できる外部評価は、行政的評価と異なって拘束力を持たず、かなり有益な意見を得ることが可能であるゆえ、積極的に摂取することが大学教育の改善を考える上で必要であると強調された。

続いて、大学における教育職員ならびに事務職員に求められることについて有益なご指摘があった。大学人は自らの教育・研究に対してのみ注意を払うのではなく、大学教育全体の運営に関する意識を持つ必要がある。FD活動の形骸化を防ぐためには、従来、多くの大学で見られた命令研修を避け、課題発見型の研修を実施することが大切である。同時に大学事務職員の能力・専門性を高めることも必須の課題である。そのためにはFD活動とSD活動との間にシーケンスがなければならない。ともすれば「技能」的側面に偏りがちな研修を大学教育に関する「教養」的側面を重視し、これを補う形で進めることが喫緊の課題である。そしてその何れも大学教育先進国であるアメリカに学ぶところ大であると指摘された。

大学教員は「研究と教育(の両立或いは対立)」という図式を乗り越え、時代にマッチした新しい「大学教授職の使命」を構築しなければならないこと、

学術運営の立場から大学の個性については大学教員自らがこれを発見・開拓していく必要があること、そして生涯学習のファースト・ステップという観点から大学教育を捉え直さなければならないことも強調された。

フロアからの質問に対しては、我が国の大学の中で、最も優れた事務職員活動ならびに研修が実施されているのは立命館大学、大阪女学院大学、立教大学であり、その何れの大学においても、大学全体の課題が職員全体に浸透していること、即ち、大学教育に関する情報の透明化と共有化がきわめて重要であることを示された。

(大学教育研究センター副センター長

助教授 三浦真琴)

平成 14 年度中部大学 FD 推進委員会委員

(印は長、 印は常任委員)

山下 興亜	山内 睦文	鎌田 信夫
立本 成文	平出 彦仁	野口 忠
山田 公夫	坪井 和男	三浦 真琴
水島 章次	水谷 秀行	後藤 英雄
葛谷 幹夫	杉井 俊夫	勅使川原誠司
安藤 文雄	岡崎 明彦	柴田 祥一
竹中 俊美	龍岡 亮二	寺澤 朝子
原田太津男	澁谷 鎮明	高木 徹
今村 洋美	杉本 和弘	大門 正幸
都築 耕生	松浦 均	大西 素子
森上 敦	渡邊 香	錦織 整
吉田 浩隆	石井 和則	富田 眞
市原 幸造	高井真珠代	

佐藤圭二教授(建築学科)が 本年度の日本建築学会賞(論文)を受賞

大学建築学科主任の佐藤圭二教授が 2002 年度の日本建築学会賞(論文)を受賞した。佐藤教授の論

コーシャル客員教授による 全学講演会を開催

国際関係学部が受け入れとなって、オハイオ大学経営学部のマンジュリカ・コーシャル教授(第29回三浦幸平客員教授)が、大学に滞在され、計3回の講演会をはじめ様々な行事に参加されたあと、本年7月末に帰国された。



コーシャル客員教授講演会

1回目の講演会は5月22日、「インドにおけるビジネス - 文化比較と日本ビジネスにとっての意味」と題して行われた。コーシャル教授はもともとインドのご出身で、今でも毎年のようにインドに帰省しておられる。インドと日本の文化はまったく違うように見えるが、家族を大切にし、人間関係に気を遣うなど、両文化には西洋文明と比べると多くの共通点がある。その一方、インドの女性は次々と専門職に就いて働いているが、日本女性がキャリアを積もうとすると多くの障害にぶちあたるといふ指摘もあった。このテーマは、次の講演会で正面から扱われることになった。第2回目の講演会は6月12日に、「日本社会における女性の地位向上への障害サーベイ結果より」という演題で実施された。名古屋地区の企業の従業員を対象とする意識調査の結果をまとめたもので、企業社会における女性と男性の共通認識と、考え方のすれ違いが浮き彫りになった。経営における男性のスタイルは管理・命令的であるが、女性是对話的であり、この対話的なスタイル

ルこそが現代の経営に求められているという結論は、きわめて興味深い。

1回目と2回目の講演会には30から40人が参加し、パワーポイントを使った講義に熱心に耳を傾けていた。講演も討論もすべて英語だったが、活発な議論が行われた。3回目の講演会は、7月24日（水）午前11時より、30号館1階3011講義室で行われた。これは主として教員向けの講義で、「学生による授業評価」に関するアメリカ合衆国での議論が紹介された。

（大学教授・国際関係学科 峯 陽一）